

尖閣列島學術調査團帰る

新種や珍種発見

冬期漁場には最適

周囲は断崖でとりまかれ、九つの小さい島からなる琉球最南端の尖閣列島の調査団（琉大助 教授、高良氏、氏外六名）一行は三月廿九日若葉丸で現地向い、約一月の旅程を終えて黒崎 けたりな顔で揃え、二十八日早丸で無事帰島した。

予定日数より一週間も延び、調査について高良氏は次のように、南小島と魚釣島にそれぞれ五日間滞在し生物地理学上の新分野と資源的立場からの価値を捉えるべく各調査分団に応じて調査を進めたわけで、「生物地理学上は重要な資料を有している。然し資源面からは水産関係を除いて余り大きな価値は認められない」ということは一行の一致した結論である。

天候に災いされて北小島に上陸出来なかつた調査中熱帯イェカとアプの襲撃に少なからず苦労したが、新種、珍種ならびに新分布などを発見したことは特筆されるべきで、詳しいことは各分団ごとに逐次公表して行く積りである。滞在期間を多くするならばより以上の成果を取れると思われ、今後の調査は琉球人による初の組織的なものとして先ず好成果を挙げたと思う。

各調査分団による成果は大要次の通りである。**生物地理**—動物、植物に分類するが、動物の分野では新種に陸産の貝、珍種は茅や葉の中を嘗するモグリ蝶の一種、新分布として

（写真は尖閣列島特有のユリ、大人の背丈よりも高い、持つているのは高良氏—魚釣島で撮る）



表されているシユウダ（蛇）は尖閣列島だけに生棲し無数の群をなしている（五匹しゆう集）その他昆虫で二種新発見、更にトカゲ、ウニなどこの辺で得られない資料を集めている。植物は新種のツツジと他に一種を発見、珍種も数種発見したがユウトウヒスイらんは新分布として記録される更にオニ百合は一米余も高くなるのびているがこれは鳥糞によつて土地が肥沃したためである。

資源面—イヌマキ、ビロウ、桑などの植物は乱伐されているようだが約十万余の海鳥（夜おし泣いていないか）と共に保護すべきである。

時冬期の水産は世界的漁場として最も有望で、そのためには同島で給水設備、船留り場、冬期の無線設備が是非必要である。

高良氏が宮古へハブ

死ぬとは迷信

試験して見事、育つ

宮古島にハブを持つて行くに必ず死ぬということで高良氏は八米島の高良のハブ（一米半）を携行して試験したところ、沖縄よりもむしろ元気が出て敏活になつたと結論づけている。即ち到着した日と翌日の二日間海岸で歩行させた後に畑に放置したというが、これまでいわれた説は砂地に歩かせるとすぐ死ぬといわれたわけだ。元来ハブは夜行の動物で射光線を嫌う点から瀕死したものであるという見方が強く、今度の試験によつてこれまでの説は迷信に近かつたと推定している。然し現在宮古でハブがいないのは事実で、これは生獲が出来ない天的条件ならびにその他の条件があるので

「南小島は第三紀層の石灰質砂岩及びびれ岩が主体で

一部に火成岩がみられた。高良を調べたがどこで捕まえたか不明で、その形骸を形成するといふことはなく、そのまゝ海に流されており、岩の間に鳥糞が溜つていていつた程度である。

波にたゞより

四つの遺骨

一行が懇ろに葬る

調査団一行は十日間鳥糞の流れたスツパイ水を飲みながら洞くつ生活を続けたというが、南小島は驛馬が密集し、近よつても逃げず一米おきに卵が散乱して親鳥が抱いているとのこと。更に魚釣島には去つた戦争で台湾へ疎開する途中、同島へ卵をとりに行つたまま帰らずに餓死した八重山出

身（四名）の遺骨が海岸で波に洗われながら放置されていたのを、一行によつて安全な場所におき替えられ、ねんころに吊られた様である。